

## 虚辞と動詞移動

石田基広

### 1 ゲルマン語派としてのイディッシュ語の動詞移動<sup>1)</sup>

イディッシュ語は西ゲルマン語派に属し、その文法はドイツ語やオランダ語に極めて近いとされる。例えば、いわゆる「V2現象」はイディッシュ語にも認められる。

(1)

a. In New York *sprechen* Juden Jiddisch. (German)

b. In New York *redn* Jidn Jiddisch. (Yiddish)

「ニューヨークでユダヤ人はイディッシュ語を話す」(MW:30)<sup>2)</sup>

(2)

a. Das Licht *zuendet* man an. (G)

b. Man *zuendet* das Licht an. (G)

1) 以下本論では、Chomsky, Noam, 1986, *Barrier*, MIT (外石、大石訳、1993、障壁理論、研究社)以降の生成文法の立場からイディッシュ語の統語構造について論じる。実は *The Minimalist Programm*, 1995, MIT (外石、大石、1998、ミニマリスト・プログラム、翔泳社)以降 Bare Phrase Structure が提唱され、Xバー構造そのものが放棄されているが、本論ではXバー構造に基づいた句構造を踏襲している。なおスペースの都合上、生成文法関係の基本的な概念の説明、また基本文献への言及は省略した。

2) 本論で引用するイディッシュ語は下記3文法書から抜粋した。また対応させたドイツ文もこれらの書から引用だが、一部筆者自身がイディッシュ語に対応させる形で作文したものもある。

なおヘブライ文字の転写にあたっては、ドイツ語との比較を容易にするため、あえて YIVO 方式を取らなかったが、本論内では統一している。

Weinreich, Max, 1992, *College Yiddish*, 5.ed., New York, YIVO. = (MW).

Mark, Yudel, 1978, *A Grammar of Standard Yiddish* (written in Yiddish), 1. ed., New York, Congress for Jewish Culture. = (YM).

Birnbaum, S.A., 1984, *Grammatik der Jiddischen Sprache*, 4.ed., Berlin, Helmut Buske. = (SB).

- c. Dos Lichtlech *zindt* man on (Y) (MW:105)
  - d. Man *zindt* on dos Lichtlech. (Y)
- 「ろうそくに火をともし」

上記の用例、すなわち平叙文において、定動詞は常に文の2番目の要素となっている。このような現象はオランダ語にも観察され、多くのゲルマン語派の特徴と見なされている。

(3)

- a. Ik *spreek* Nederlands. (塩谷：40)<sup>3)</sup>.
  - b. In Nederlands *spreekt* men Nederlands.
- 「オランダではオランダ語が話される」

ただし(2) d の用例で、イディッシュ語はドイツ語とは異なり、いわゆる分離動詞の前綴り (on) が文末に無い。さらにイディッシュ語は、ドイツ語では許されない次のような構文を許容する。

(4)

- a. Weil ich damals nicht zu ihm gekommen *bin*, will er mir kein Geld geben. (G)
  - b. Weil ich *bin* demelt nit gekumen zun ihm, will er mir nit geben kein Geld (Y)
- 「あの時私が彼を訪ねなかったので、彼は私に金をくれようとしなない」(SB:68)

ここでドイツ語の *weil* はいわゆる「副文」を導く従属接続詞であり、定動詞は文末に置かれる。これはオランダ語にも認められる語順である (塩谷：112)。しかしながらイディッシュ語の副文では、定動詞は3番目の要素となっており、文末にも、あるいは第2位にも位置しない。次のような文はイディッシュ語では許容されない。

(5)

- a. \*Weil *bin* ich demolt nit gekumen zu ihm,...(Y)
- b. \*Weil ich demolt nit gekumen zu ihm *bin*,...(Y)

同様に母文 (Matrixsatz) に埋め込まれた間接疑問文において、イディッシ

3) 塩谷饒、1987、オランダ語文法入門、東京、大学書林、= (塩谷)。

ユ語では以下のような語順が可能である。

(6)

- a. Man sagt, dass es sehr kalt *ist*. (G)
- b. Man sagt, es *ist* sehr kalt. (G)
- c. Men sogt, as es *is* sehr kalt. (Y) (MW:327)
- d. Men sogt, es *is* sehr kalt. (Y)

ドイツ語と大きく異なる点は、「補文標識」(dass, as = eng. that)の有無に関わらず、イディッシュ語では語順に非対称性が見られないことである。

この現象については、ドイツ語の場合、定動詞はCの位置へ移動するが、この位置に語彙的なC(dass)が置かれた場合、動詞の移動が妨げられるという見解がこれまで強く支持されてきた。本論でも、ドイツ語の定動詞の移動現象については、V-Comp移動によると考える<sup>4)</sup>。

ではイディッシュ語の場合、動詞の着地点はどこか。本論ではこの問題に関連して、筆者はイディッシュ語の副文に現れる次のような構文に着目したい。

(7)

- a. Ich weiss, wer (*e*)s' *hot* ihm gesehn. (Y) (SB:70)
  - b. Ich weiss, wer ihn gesehen *hat*. (G)
- 「彼を見たのが誰か、私は知っている」

ここでイディッシュ語は二つの点で、ドイツ語やオランダ語と異なる。第一に、wer 以下は母文に埋め込まれた間接疑問文であるが、定形の助動詞 (hot = eng. has) が文末に位置していないこと。二つ目に指示対象を持たない中性人称代名詞

4) 動詞第2位については、Cへの移動を主張する Haider らの立場によっている。

Haider, Hubert, 1985, "V-Second in German", *Verb Second Phenomena in Germanic Languages* (ed. Haider, H and M. Prinzhorn), Riverton, Foris Publications, 49-76.

Haider, H (ed.), 1995, *Studies in Comparative Germanic Syntax*, Studies in Natural Language and Linguistic Theory, Vol.31, den Haag, Kluwer Academic.

Vikner, Sten, 1995, *Verb Movement and Expletive Subjects in the Germanic Languages*, (Oxford Studies in Comparative Syntax), Oxford U.P.

Grewendorf, Guenther, 1988, *Aspekte der deutschen Syntax*, Tuebingen, Gunter Narr Verlag.

(es = eng. it) が表れていること。この代名詞を「虚辞」と呼ぶことにする。

本論では、二つ目の「虚辞」の問題について、第一の語順の問題と関連させつつ論じることとする。

## 2 虚辞

はじめにイディッシュ語における虚辞(es)についてまとめておく。もっとも一般的な用法として、esは本来の主語の代わりに文頭に置かれうる。ただしこの場合本来の主語は代名詞であってはならない。Mark (375)は、虚辞esは動詞を2番目に位置させるための埋め草であると述べている。

(8)

a. *Es is der student gekumen zu seine eltern af Pessach.* (Y)

「その学生がペサハの祭りに両親のもとに帰ってきた」

b. *Er wet bald kumen.* (Y)

「彼はまもなく来る」

c. *\*Es wet er bald kumen.* (Y)

d. *Kumen wet er.* (Y) (Mark:375)

Markは副文内に虚辞のesが表れる場合について特に言及していないが、例えば(7) aのesを削除した文は非文となる。

(9)

a. *\*Ich weiss, wer hat ihm gesehn.* (Y)

ここで定動詞hatはすでに副文内で第2位を占めているにも関わらず、構文的に許容されない。Mark (379)は副文で定動詞は第3位に来るとしているのので、この場合esは定動詞を3番目に移動させるための埋め草と自動的に解釈されるのであろうか。

一方Weinreich(333)は、「疑問代名詞が間接疑問文の主語であるとき、esが疑問代名詞と定動詞の間に挿入される」と述べている。Birnbaum (70)はさらに感嘆文でも同じく虚辞のesが挿入される現象をあげている。

(10)

a. *Wie es leichten die stern!* (Y) (BS:70)

「星が何と輝くことか」

ただし虚辞に関しては、さらに補足が必要である。第一に、虚辞となりうるのは *es* だけではない。 *dos* もたびたび使われる。

(11)

a. *Dos spielt mein schwester piäne.* (Y) (MW:333)

「ピアノを弾いているのは姉であった」

また *es*、*dos* 以外の人称代名詞が虚辞として機能していると考えられる例もある。

(12)

a. *Der chaver (= eng. friend), wos er hot ihm demelt geschrieven, is gewen Schmucl.* (Y) (SB:69)

「彼に当時手紙を書いた友人はサミュエルだった」

（「彼が当時手紙を書いた友人はサミュエルだった」とも解釈可）

ここで関係文を主格と取ると、定形動詞 *hot* の前に冗長な *er* が現れている。指示代名詞 *er* は先行詞との関係を明示するために挿入されたと考えることも可能かもしれない。ただし上記の例では、先行詞と指示関係にあるのが *er* なのか、*ihm* なのか曖昧である。もし後者であると見なすなら、虚辞としての人称代名詞 (*ihm*) は関係代名詞が主語（主格）以外の場合（この場合は目的語、対格）にも利用されることになる。実際、第二の問題点として、疑問代名詞が主語以外の場合でも虚辞が生じている例がある。

(13)

a. *Men hot gewolt wissen wie gross (e)s' senen jene Stet.* (Y) (BS:70)

「その町がどれほどの大きさか、皆知りたがった」

ただし Birnbaum によれば(12)の関係代名詞文の用例で、先行詞と指示が一致する人称代名詞は省略可能である。すなわち

(14)

a. *Der chaver, wos hot ihm demelt geschrieven, is gewen Schmucl.*  
(wos = chaver) (Y)

これに対して(13)の埋め込み文では虚辞を省略することは許されない。従って、先行する母文に埋め込まれる間接疑問文と、関係代名詞文とは文構造が異なると思われる。ただし問題は複雑化するが、不定関係代名詞の場合になると虚辞

es の省略は許されない。

(15)

a. Wer es git, der kriegt. (Y) (Mark:245)

「与える者は、取る者でもある」

本論では、疑問代名詞に導かれる埋め込み副文と虚辞の es に限って考察を進めることとする。

### 3 虚辞と動詞位置

前節では、同じ副文でも、間接疑問文と関係代名詞では虚辞の分布に差異があることを指摘した。ところで(7)、(13)の例で虚辞 es は常に定動詞の前に置かれている。このことから、虚辞の挿入には定動詞の位置が深く関わっていることが推測される。そこでイディッシュ語において定動詞の着地点はどこにあるのか、すでに第1節で取り上げたこの問題に戻りたい。ドイツ語の動詞着地点が Comp と考えられることはすでに指摘した。

Diesing はイディッシュ語の動詞移動は、C ではなく、I を着地点とする説を展開している<sup>5)</sup>。具体的には以下のような分析がなされる。まず単純な疑問文について考察する。

(16)

a. Wuhin geyt ihr? (Y) (Diesing:51)

「どこ行くの」

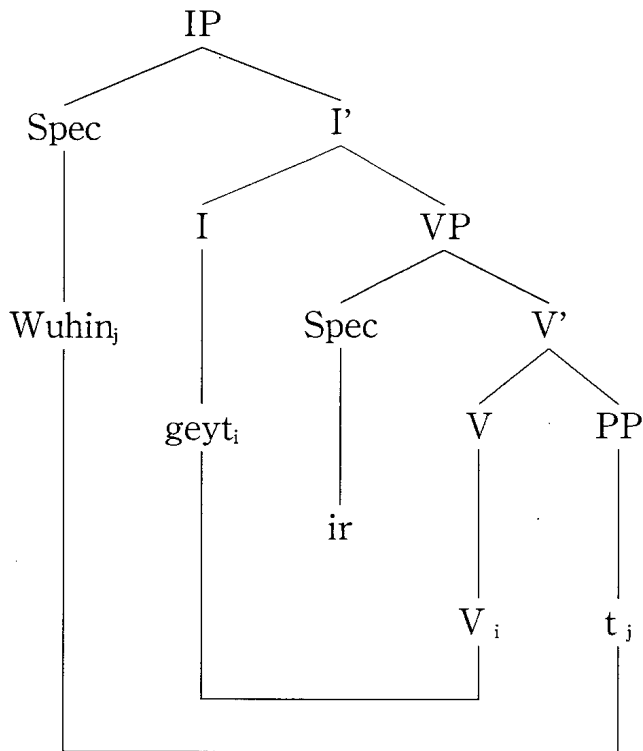
5) Diesing, Molly, 1990, "Verb Movement and the Subject Position in Yiddish", *Natural Language and Linguistics Theory*, vol.8, den Haag, Kluwer Academic, 41-79.

なお生成文法の立場からイディッシュ語の統語構造を論じた研究に以下がある。

Lowenstein, Jean, 1977, "Relative Clause in Yiddish", *Linguistic Analysis*, vol.3, number 3, Amsterdam, Elsevier North-Holland, 197-216.

Prince, Ellen F, 1981, "Topicalization, Focus Movement, and Yiddish Movement", *Proceedings of the annual meeting of the Berkley Linguistics Society*, vol. 7, 249-264.

Besten, H. den and C. Moed-van Walraven, 1985, "The Syntax of Verbs in Yiddish", *Verb Second Phenomena in Germanic Language*, 111-136.



Diesing はイディッシュ語には Xp 移動に関してパラメータがあり、[Spec, IP] は「A 位置」にも、「A バー位置」にもなりうるとしている。この場合主語が VP 内部にとどまることになり、主格は I によって与えられるとする理論に反する。しかしながら、これは GTC (Government Transparency Corollary) によって回避されうる。なぜならこの説に従えば、I へと上昇した定動詞は、相変わらず VP 内の要素を統率可能だからである。いずれにせよ、[Spec, IP] 位置を占める Wh 句と、主要部移動によって I に位置する定動詞の間に他の着地点は無い。従って次のような語順は排除されることになる。

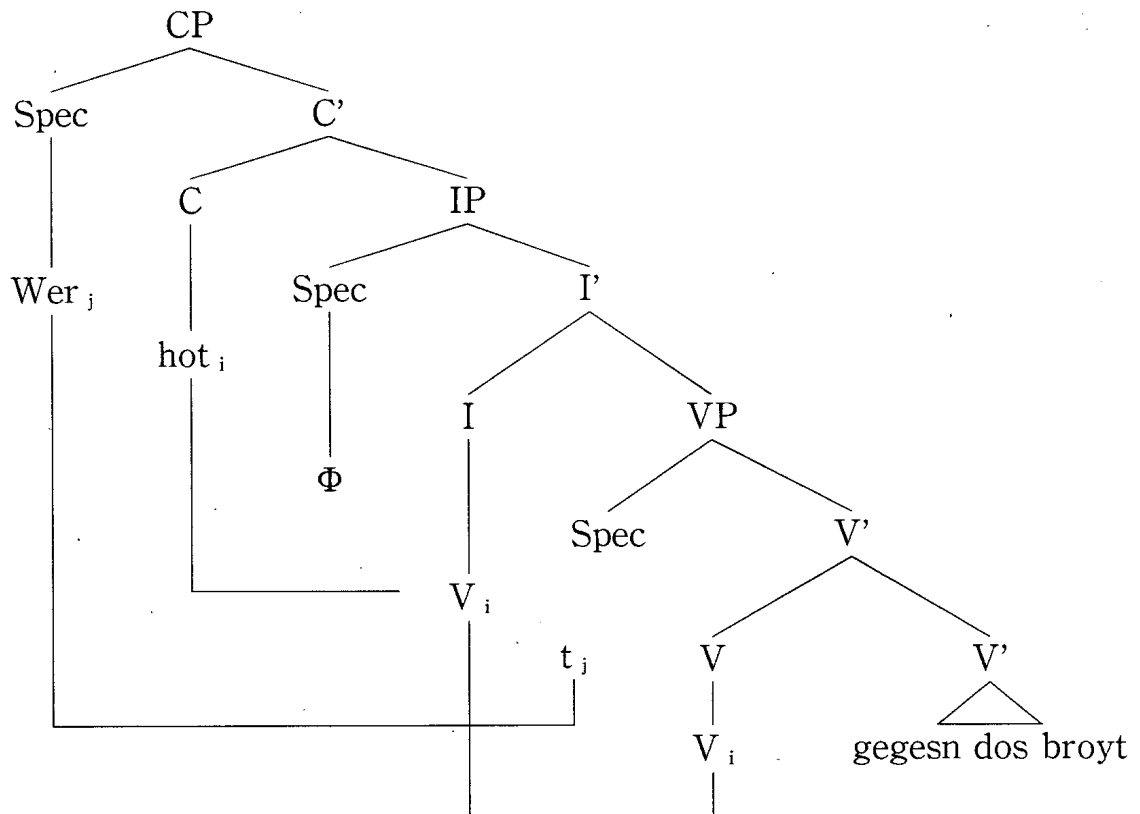
(17)

- a. \*Wuhin ir geyt?
- \* [Wuhin [ir [geyt]]] ?

これに対して、仮にこれらの文の基底構造に IP 節ではなく、CP 節を仮定するならば、次のような構造が考えられる。(Diesing:52)

(18)

- a. Wer hot gegesn dos broyt. (Y)
- 「誰がそのパンを食べたのか」



この場合 Wh 要素が直接 [Spec, CP] に移動するとする。その場合 C によって統率される [Spec, IP] は空であり、ここへの移動を妨げる要因が無いにもかかわらず、[Spec, IP] に間接目的語を移動させた次の文は許容されないのである。

(19)

- a. \**Was hot dem rov Max gegeben?* (Y)  
 「何をラビにマックスは与えたのか」

ここで Was が [Spec, CP] を占めるとすれば、与格の dem rov 「ラビに」は [Spec, IP] に位置すると仮定できるが、しかしこの文は非文となる。

次に Wh 要素は一度 [Spec, IP] に移動した上で、さらに [Spec, CP] へ進むとするなら、[Spec, IP] には痕跡が残り、着地点とはならない。これにより、(19a) の非文性は確かに説明できる。ところがこの仮定は次のような埋め込み疑問文を排除してしまう。

(20)

- a. *Ich weiss was bei mir tut sich.* (Y)  
 「自分がどうなるか分かる」

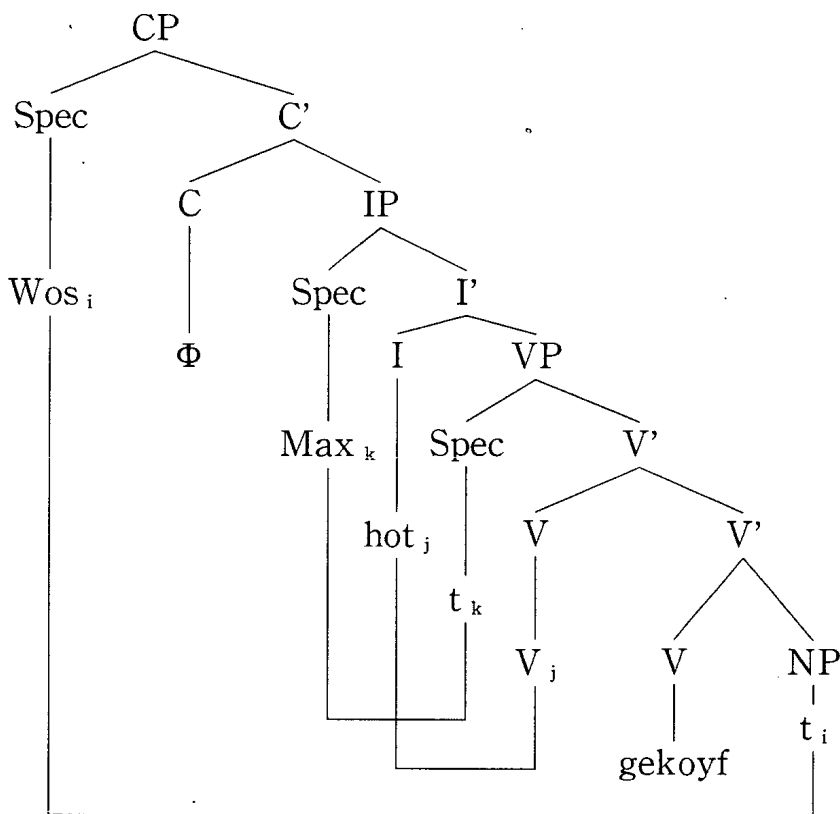


この文は Wh 移動と Topicalization が同時に生じる例である。Wos と bei mir にそれぞれ異なる着地点が必要であるが、[Spec, IP] に Wh 移動の痕跡があると見なすなら、最大投射である PP が副文内の定動詞 tut の前に着地可能な点はもはや [[Spec, CP] 一つしか残っていない。Wh 句が 2 度にわたって移動するという上記の仮定ではこの文の合法性を説明できなくなるのである。

Diesing (54) はイディッシュ語の埋め込み疑問文について下記の構造を仮定する。

(21)

- a. Ich weiss nit wos Max hot gekoyft. (Y)  
 「マックスが何を買ったのか、私は知らない」



問題は、ここで定動詞がさらに C へと移動しない理由であるが、埋め込み疑問文の場合、C 位置は、母文の動詞が要求する不可視の要素  $\Phi$  が挿入されているとする説が幾つかのゲルマン語に対して提示されており (Diesing:54)、イディッシュ語についてもこれがあてはまると仮定される。つまり C への主要部移動はこの  $\Phi$  によって阻止されるのである。

要約すると、疑問文で Wh 句は A バー位置を許容する [Spec, IP] 位置に移動するが、埋め込み疑問文の場合、Wh 句は [Spec, CP] へ移動する。ただし

C位置は、母文の要求する  $\Phi$  が占領しているため、Cへの「主要部移動」は妨げられることになる。

#### 4 虚辞の位置

イディッシュ語では動詞の着地点は、CではなくIであるとする仮説の当否については意見の分かれるところであろう。しかしながらこの仮説によれば、2節で述べた虚辞 *es* の分布について明確な規則性を見出すことができるのも事実である。(7)で挙げた文を再掲する。

(22)

a. Ich weiss, wer (*e*)s' hot ihm gesehn. (Y) (SB:70)

b. Ich weiss, wer ihn gesehen hat. (G)

「彼を見たのが誰か、私は知っている」

さらに Diesing (68)から例文を加える。

(23)

a. Ich weiss nicht wer gekommen ist. (G)

b. \*Ich weiss nit wer is gekumen. (Y)

c. Ich weiss nit wer es is gekumen. (Y)

「誰が来たのか、私は知らない」

ここでも埋め込み疑問文の Wh 句は [Spec, CP] に位置している。そして Diesing の仮説によれば C には、母文の要求する  $\Phi$  が位置し、定動詞 *hot*, *is* の上昇が阻止されることになる。ところで Wh 句は、VP 内主語の位置から直接 [Spec, CP] へと上昇するというのが Diesing の仮説であった。この場合、[Spec, VP] は I に移動した定動詞によって統率される。これに対して [Spec, IP] は空所のままであり、またこの位置は語彙統率も、先行詞統率もされることが無く、ECP (Empty Category Principle) に違反する。なぜなら C の位置には母文の要求する記号が存在し、これにより先行詞統率は阻止され、また語彙統率を可能にする定動詞もこの位置へは移動できないからである。

[Spec, IP] はまた topicalize される要素の移動位置でもあるから、ここに例えば“frier”「先に」のような要素が移動される場合、*es* の挿入は不要（不可能）になる。Diesing (69)から用例を挙げる（転記法を修正している）。

(24)

- a. Sie is gekumen sehn wer frier vet kontshen. (Y)
- b. \*Sie is gekomen sehn wer frier vet *es* kontshen. (Y)
- c. \*Sie is gekumen sehn wer frier *es* vet kontshen. (Y)

「彼女は、誰が最初に仕事を終えるか見にきた」

さらに虚辞の位置を統率されない [[Spec, IP] と見なす考え方は、次のような主語以外の要素が間接疑問代名詞になっている場合にも、虚辞が義務的に現れる文例を説明することが可能でなる。同じく Diesing (68) から引用する。

(25)

- a. Ich freg sich wos *es* hot emitser gekoyft. (Y)
- b. \*Ich freg sich wos hot emitser gekoyft. (Y)

「私は、皆が何を買ったか尋ねる」

この場合も、定動詞の前の [Spec, IP] が空所である。このため Topicalization によって何らかの要素が移動されない場合、*es* が義務的に挿入されなければならない。

## 5 結 論

間接疑問文に義務的に挿入されるイディッシュ語の虚辞 *es* については、定動詞の位置を調整するための埋め草とする考えがあり、またその出現は間接疑問代名詞が主格であるときに限られるなどと指摘されてきた。しかしながらこれらの説明は不十分であり、個別の現象に限定された ad hoc な説明に過ぎない。

本論では、ゲルマン語に観察される V2 現象との関連から、*es* の挿入を、言語現象の一般原理から導き出す可能性を検討するため、生成文法理論に基づき、イディッシュ語独自の *es* 挿入現象を一般化しようと試みた。

しかしながらこの仮説は、(15a) で上げた *wer es git, der bekommt.* のような不定関係代名詞でも *es* の挿入がなされることを説明できない。この場合、そもそも *Wh* 句の移動先は [Spec, CP] 以外にはありえないのだが、*C* の位置へ定動詞が移動するのを妨げる要素がない。埋め込み疑問文で、母文の動詞が *C* に  $\Phi$  を要求するという仮説をこの文にそのまま適用することはできないからである。

不定関係代名詞における虚辞 *es* と、埋め込み疑問文における *es* は、まったく別の原理によって生成される可能性を排除するものではないが、しかしながら

直感的に言えば、この二つの間に異なる原理を仮定するのは不自然に思える。

不定関係代名詞と虚辞 *es*、その埋め込み疑問文との関係については、稿をかえて論じたい。